

国防の第一線を担い、 「やりがいがあった」

一般社団法人 日本防衛装備工業会 事務局長

新村暢宏さん

Nobuhiro Niimura



経歴

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。1977年、防衛大学校21期卒業。陸上自衛隊第3後方支援連隊武器隊長(伊丹市)、第11後方支援連隊長(札幌市)、陸上幕僚監部装備部武器化学課長(市ヶ谷)、中部方面総監部装備部長(伊丹市)、2008年、陸将補に昇任、武器学校長兼土浦駐屯地司令、中央業務支援隊長兼市ヶ谷駐屯地司令を経て、11年退官、12年から現職。61歳。11年の東日本大震災では、中央業務支援隊長として現地部隊への物資の補給など、後方サポートを陣頭指揮した。
<http://www.jadi.or.jp/>

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

素晴らしい自衛隊組織

幹部自衛官を養成する防衛大学校を卒業後、陸上自衛隊陸将補を経て2012年、防衛装備工業の健全な振興などを主な業務とする、日本防衛装備工業会の事務局長に。自衛官になることについては、「父親も勧めてくれましたので迷いはなかったですね」。

大卒の幹部自衛官は入隊後さまざまな教育や専門技能の習得、語学研修が義務

づけられる。新村さんは陸上自衛隊の16ある専門職のうち、戦車やミサイルなどの主要装備品の整備・補給、不発弾処理など後方支援を担当する武器科に進んだ。

「安全保障、国防の第一線を担い、国際情勢、軍事情勢を含め、最新、最先端の情報、技術に接しますから、やりがいがありましたね」と振り返る。

指揮官当時には親身になって隊員の相談に乗り、隊員の両親から直接感謝されることもたびたび。「自衛隊の教育は、人

を多角的な視点で評価します。そして人のつながりを大事にする素晴らしい組織です。自衛隊に入ってよかったと思いますね」。

給料の大半を弟妹の学費にと仕送りしている若い隊員や退職金を母親の高額な手術費用に充てた隊員など、「いろんな境遇の隊員がいますね。逆に若い隊員から教えられることもいっぱいあります」とも。

軍神・橋中佐像復活を

歴史遺産の保存や復活を求める声は本欄でしばしば上がる。駿府城公園内には、かつて旧陸軍歩兵第34連隊、いわゆる静岡34連隊の象徴的存在、軍神・橋周太中佐の銅像があった。「橋中佐像が残っていないのは残念です。御殿場の板妻駐屯地に中佐の小さな銅像があり、そこが陸自の第34普通科連隊。昔と同じ部隊番号の連隊が郷土にあるのは珍しいんです。一つの歴史として、(旧連隊跡地に)中佐像があればいいなと思いますね」と銅像復活に期待する。

仕事柄、命の尊さを人一倍感じている新村さん。無差別爆撃で市民2千人以上が犠牲になった静岡空襲も「風化させないでほしい」と願う。

実家へ帰ると、「よく長谷通りにある『大やきいも』さんのおでんを食べます」。庶民的な人柄は今も変わらない。

(文・写真…長田義明)